

奈良県御所市

# 今出遺跡

—第5次発掘調査報告—



平成22年(2010年)2月  
御所市教育委員会

## 例　言

- 本書は、携帯電話鉄塔基地局建設工事に伴う事前調査として、KDDI株式会社の委託を受け御所市教育委員会が実施した、御所市大字蛇穴 285 番地 1 に所在する今出遺跡第 5 次調査地の発掘調査報告書である。
- 現地調査期間は以下の通りである。  
平成 21 年 7 月 17 日～同年 8 月 7 日
- 調査は、御所市教育委員会 岡田圭司が担当した。
- 本書の執筆・編集は岡田が行った。
- 参考文献は、本文末尾に一括して掲げた。
- 本書で用いた「北」は「磁北」である。
- 現地調査および本書刊行にかかる費用は、KDDI 株式会社がすべて負担した。関係各位にご理解・ご協力をいただいたことを記し、深謝します。

## 本文目次

1. 位置と周辺の遺跡	1
2. 調査の契機と経過	2
3. 調査の成果	
①既往の調査	2
②調査区の基本層序	3
③遺構	4
④遺物	7
4. まとめ	9

## 挿図目次

- 図 1 今出遺跡周辺の遺跡分布
- 図 2 調査地と周辺地形
- 図 3 調査区配置図
- 図 4 調査区土層断面図
- 図 5 第 1 遺構面平面図
- 図 6 第 2 遺構面平面図
- 図 7 第 3 遺構面平面図
- 図 8 第 4 遺構面平面図
- 図 9 第 6 層出土土器

## 図版目次

- 図版 1-1 第 1 遺構面 全景（南から）
- 図版 1-2 第 2 遺構面 全景（南から）
- 図版 2-1 第 4 遺構面 全景（南から）
- 図版 2-2 第 4 遺構面トレンチ 全景（南から）
- 図版 3-1 調査区西壁 全景（南東から）
- 図版 3-2 調査区南壁 全景（北から）

## 1. 位置と周辺の遺跡

御所市は奈良盆地の南西部に位置する。西部には葛城山・金剛山、南部には巨勢山丘陵、東部には国見山および高取山などがあり、市域の北側のみが盆地平野部の一角を占めている。当該遺跡は、市域のほぼ中央部にあたり、南北に流れる葛城川の東に位置する。その範囲は御所市今出、池ノ内、蛇穴の各一部に相当し、東西 850 m・南北 500 m 程と推定され、その地形は南西から北東方向へ緩やかに傾斜している。また標高は 98 ~ 100 m 前後である。

図 1 に示したように、その周辺には、当該遺跡の所属時期である弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が多く点在している。特に、当該遺跡の南側には中西遺跡が所在する。中西遺跡では弥生時代から古墳時代前半の遺構・遺物が知られていた（関川 1989、木許 1990・1991）が、近年の調査で、初期須恵器が出土した竪穴住居などが検出され（御所市教委 2009b）、遺跡の範囲が広がることが確認されている。この遺跡は、隣接する国指定史跡の室宮山古墳（秋山・網干 1959、木許編 1996 ほか）にほぼ併行する時期の集落跡として注目される。

一方、葛城川対岸（西岸）にあたる地域では、弥生時代を通じて拠点の大集落として営まれた鴨都波遺跡が所在している。鴨都波遺跡（網干 1965 ほか）では弥生時代の竪穴住居・水路や大溝などの他に、古墳時代前期の古墳として三角縁神獸鏡など豊富な副葬品が出土した鴨都波 1 号墳（藤

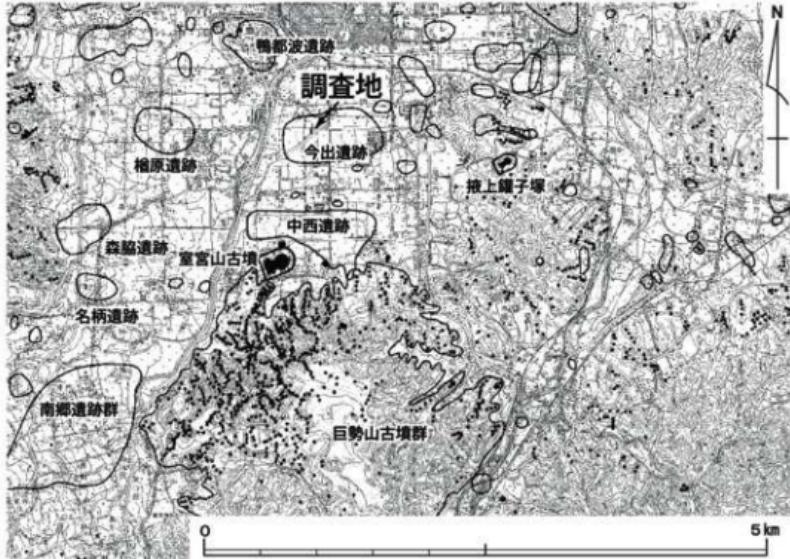


図 1 今出遺跡周辺の遺跡分布 (S. = 1/50, 000)

田・木許編 2001) や、後期の竪穴住居(阪本 2002)が検出されている。

また、葛城山・金剛山東麓部には古墳時代の遺跡として樅原遺跡・名柄遺跡・南郷遺跡などが所在している。樅原遺跡は、古墳時代前期の溝や土坑、後期の竪穴住居などが検出されており、このうち前期の土坑からは搬入土器を含む良好な古式土師器の一括資料などが出土している(藤田 1994)。また名柄遺跡では古墳時代中期後葉から後期前葉にかけての方形單郭の豪族居館跡と考えられる遺構などが検出されている(藤田 1991)。南郷遺跡は古墳時代中期中葉以降の遺跡で広域の空間に住居、生産、祭祀の要素が散在している(坂編 1996 ほか)。

## 2. 調査の契機と経過

当該遺跡におけるこれまでの調査地は図 2 に示した通りである。

第 5 次調査は平成 21 年 4 月、御所市大字蛇穴 285 番地 1 において携帯電話鉄塔基地局建設を目的とする発掘届が提出されたことにより実施した。工事の基礎工に伴う掘削深度は 2.9 m に達するとの届出内容であった。また工事掘削影響範囲は 97 m<sup>2</sup> であり、敷地境界付近にまで及ぶとのことであった。ただし、発掘調査は隣地境界への影響を考慮して、境界から 1.5 m を離して行った。そのため、発掘調査の対象範囲は約 85 m<sup>2</sup> となった。敷地内における発掘調査区の配置は図 3 に示した通りである。

遺構面までの掘削は重機および人力を併用し、各遺構の埋土の除去は人力で行った。現地発掘調査の期間は平成 21 年 7 月 17 日から同年 8 月 7 日までの実働 16 日間であった。

## 3. 調査の成果

### ①既往の調査

第 1 次調査から第 4 次調査については、いずれも御所市教育委員会が実施した。

第 1 次調査(木許 2007)では、遺構は検出されなかったが洪水層とみられる土層の堆積や、かつて池か沼地のような滞水状態で生成したとみられる黒灰色粘土層が検出された。遺物については磨耗著しい古墳時代の土師器 5 点が検出している。

第 2 次調査(御所市教委 1989 年調査)は厳重立会調査としたが顕著な遺構・遺物は認められていない。

第 3 次調査(藤田 2008)では河道が認められ、その埋土から自然遺物である枝葉多数のほか、平安時代の須恵器などや加工木が検出されている。

第 4 次調査(木許 2007)では上層・下層から各々 1 条の流路を検出している。それらの流路は古墳時代前期前半から中期前葉頃のものと、弥生時代後期後半頃のものである。古墳時代のものは護岸杭を伴っていた。

またこれら以外に平成 21 年 10 月現在、当該地の東約 500 m の地点で京奈和自動車道建設に伴つ



図2 調査地と周辺地形 (S.=1/5,000)

て、蛇穴地区として、奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施している。

この地区では、弥生時代の水田面、古墳時代の溝、鎌倉時代の耕作地と考えられる小溝などが検出されつつある。

## ②調査区の基本層序

調査区の層序は、西壁・南壁で作成した土層断面図を図4、図版3-1・3-2として示した。調査区では、現地表面から最深部で約2.8mまでを掘削した。調査区の土層堆積状況は以下に述べる通りであり、このうち遺構面は第1から第4遺構面の計4面を検出した。

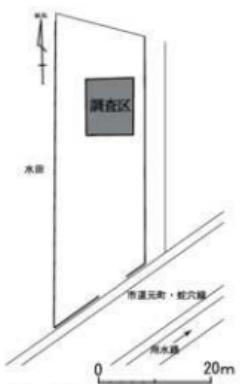


図3 調査区配置図 (S.=1/1,000)

現地表面から約50cmまでは、旧耕作土層（第4層）の上面になされた現代の盛り土（第1層から第3層）であった。このうち、第3層の上面で攤乱土坑を計8基検出した。それらの規模は一辺約1mの方形状や、短辺2m、長辺4mの長方形を呈するもの、長辺4m以上の楕円形を呈するものなどで深さ約0.2～2mを測る。これらの攤乱土坑には廃材・ガラス片・空き缶などの産業廃棄物が含まれていた（第2層）。なお、第2層となる廃棄物は攤乱土坑を埋めるだけにとどまらず、そこに収まらない分量を第3層の上層にも散きつめていた。

次に、旧耕作土層（第4層）の下層は暗褐色砂質土層（第6層）であった。この層の上面が第1遺構面である。これより下層の第7層から第12層はシルト・砂礫土・砂礫によって互層をなしており、これらは洪水によって運ばれてきた客土層であるとみられる。そして、さらにこれらの下層で、第13層である明黄褐色粘質土層の上面で第2遺構面を、第14層である暗灰褐色粘質土（砂礫混じり）層の上面で第3遺構面を、第15層（暗青灰色粘質土（砂礫混じり）層）と第17層（灰色粘質土層）の各上面で第4遺構面を検出した。

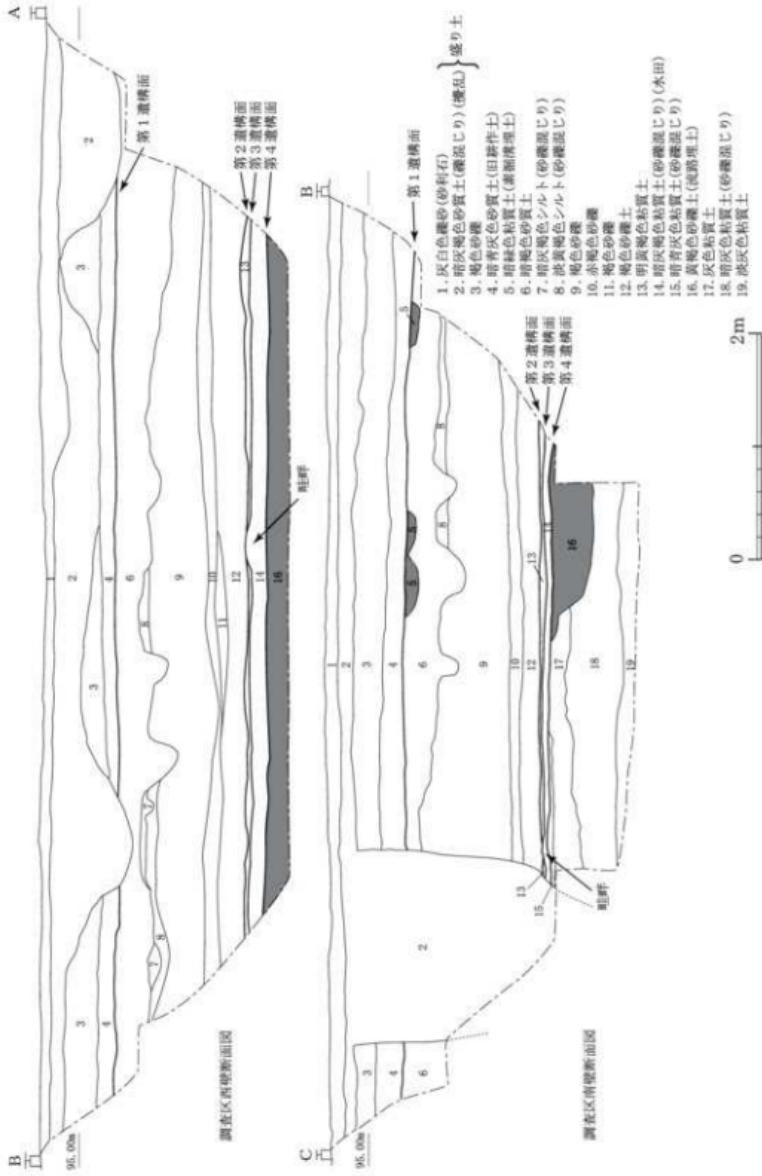
第4遺構面を検出した時点で、掘削深度は約2.0mに達していた。第4遺構面では後述するように流路を検出したが、狭い調査地でこのままの状態でこれ以上深く掘削することは作業上の危険を伴う。そこで流路埋土および第17層より下層の状況については掘削範囲を限定したサブトレーナーを設定することで確認した。このトレーナー規格は東西約3.4m、南北約1.2m、深さ約80cmである。その結果、第17層より下層は粘質土層（第18層・第19層）であることを確認した。ここでは、遺物の出土は認められなかった。

### ③遺構

遺構は、図5・図6・図7・図8、表紙写真、図版1・図版2に示す通り、各遺構面で検出した。第1遺構面は、大部分に上記の攤乱が及んでいたが、一部に素掘溝を検出することができた（図5、図版1-1）。素掘溝は、幅約20～50cm、深さ約10cm、検出長約7mまでを測る。その埋土は、暗緑色粘質土であった。また、素掘溝から土師器と瓦器の小破片が出土したが、細片のためこれらの年代は特定できなかった。ただ、この面の基盤層である第6層から中世の羽釜口縁部片（図9）が出土したこと、素掘溝は中世以降に形成されたことが判る。

第2遺構面では人間のものとみられる足跡遺構を39基検出した（図6、図版1-2）。これらの足跡遺構は本来水田などの遺構に伴うと推測されるが、この面では足跡遺構のほかに畦畔などの遺構は検出されなかった。図版1-2には水田の畦畔が見えているが、これは下層の第3遺構面の水田に伴う畦畔の高い部分が検出されはじめている状態で、この第2遺構面に伴うものではない。第2遺構面の本来の遺構形成面は洪水によって削平されたとみられる。

足跡遺構は水田などの柔らかい粘土を踏み込んだ際にできる痕跡であり、小さいもので長さ約6～12cm、幅約6～9cm、大きいもので長さ約15～32cm、幅約9～14cm、それぞれ深さ約5～



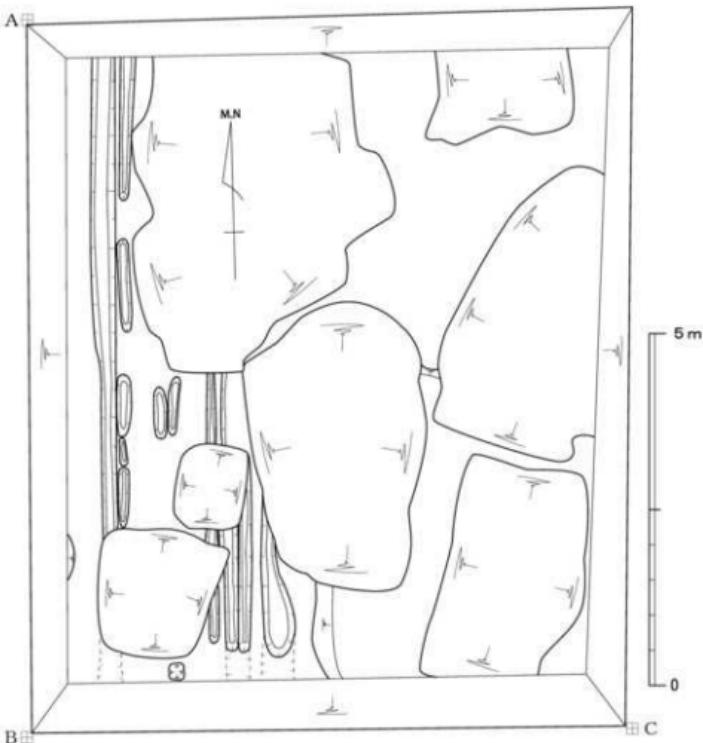


図5 第1遺構面平面図 (S.=1/80)

10 cmを測る。その埋土は、主に第2遺構面上層の褐色砂礫土層（第12層）と同じ土質であった。検出した足跡遺構は各々の向きが一定ではなかった。またこの足跡遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第3遺構面では水田に関わる各種遺構を検出した（図7、表紙写真）。水田は幅約30～50 cmの畦畔によって区画されており、調査区内では少なくとも4面に区画されている様子が窺えた。この畦畔の土質は水田耕土と同様に暗灰褐色粘質土（砂礫混じり）層（第14層）であった。また畦畔には水口とみられる切れ目も見えた。農作業の際に生じたと考えられる足跡遺構は15基を検出した（図7）。図7のトーンで示した足跡遺構がそれである。その法量は、小さいもので長さ約6～15 cm、幅約6～9 cm、大きいもので長さ約18～32 cm、幅6～12 cm、それぞれ深さ5～10 cmを測る。その埋土は主に第3遺構面上層の明黄褐色粘質土層（第13層）と同じ土質であった。

足跡遺構は水田形状に沿って、全体的に南北方向と北東～南西方向の2方向に直線的に検出さ

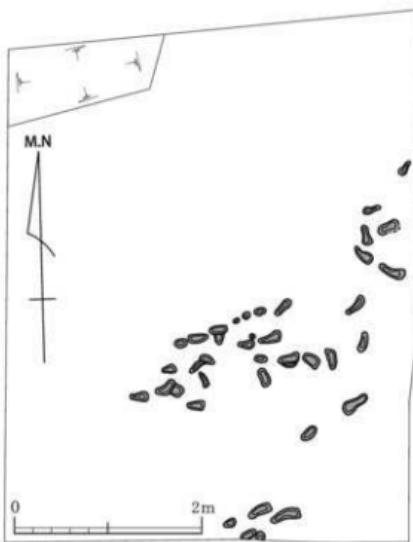


図6 第2遺構面平面図 (S.=1/60)



図7 第3遺構面平面図 (S.=1/60)

れたが、第2遺構面の足跡遺構と同様に、足跡遺構の各々の向きが一定ではなかった。ただし、第3遺構面に伴う足跡遺構が畦畔の上面部分を踏んでいないことは注意される。この足跡遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

区画された各水田の本来の規模は、多くが調査区外に広がっているために判然としない。しかし、それらの形状は方形を呈するとみられ、北半部の水田の南辺が約2.5mを測ることから、いわゆる小区画水田である可能性が高い。また、水田の検出面はほぼ平坦であったが、当該調査地の周辺地形の高低差から、検出した水口による給水・排水は南から北の方向へ行われていたと考えられる。

これらの水田に関連する遺構に伴う遺物は出土しなかった。

第4遺構面では南北方向に延びる流路を検出した(図8、図版2-1、2-2)。その規模は幅約1.7m以上、深さ約40cm、長さ約4.5m以上を測る。流路西岸は調査区外のため検出できなかった。先述の通り、流路埋土は危険防止のため部分的に掘削して留めたが、遺物は出土しなかった。

#### ④遺物

遺物は土器のみであり、18cm×25cmのビニール袋にして1袋分が出土した。その内で実測が可能な1個体、土師器羽釜片を図9に掲げた。

また、上記のように第1遺構面(暗掲

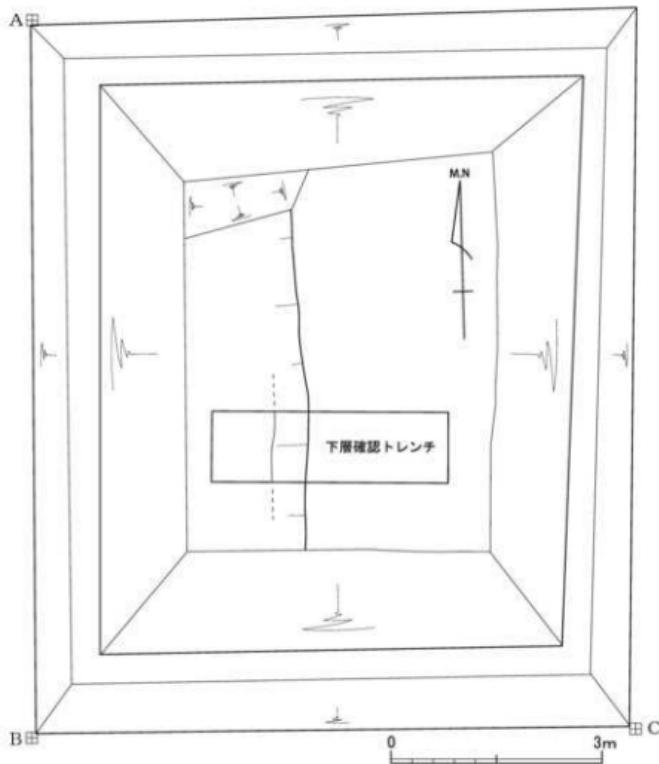


図8 第4遺構面平面図 ( $S_r = 1/80$ )

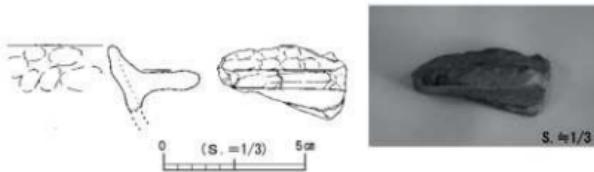


図9 第6層出土土器

色砂質土層上面)で検出した素掘溝から、土師器と瓦器の小破片が出土した。このうち器種を特定できるものはなかったが、土師器皿の口縁部片と推測されるものがあった。

図9の羽釜片は暗褐色砂質土層(第6層)から出土した。口縁部分と鉤が一部残存していたが、体部の直径を復元できるほどではなかった。摩耗しているが、調整は内外面に指オサエ後にナデが施されている。その時期は室町時代(14・15世紀)と考えられる。

## 4.まとめ

以上の通り、今次調査では、第1遺構面で中世以降の素掘溝、第2遺構面で水田遺構に伴うとみられる足跡遺構、第3遺構面で水田に関わる各種遺構、第4遺構面で流路を検出した。

第2遺構面から第4遺構面までの各遺構の形成時期については、遺物が出土しなかったために特定することができなかった。ただし、今次調査地の周辺をみると、弥生時代前期から中期までの水田面や古墳時代の溝（樋考研 2009）および、弥生時代後期後半頃の流路と古墳時代前期前半から中期前葉頃の、護岸杭を伴う流路（木許 2007）が検出されている。このような状況から、今次調査で検出した小区画水田の形成年代は、弥生時代前期から古墳時代中期前葉のうちのいずれかである可能性が高いといえよう。

近年、京奈和自動車道建設に伴う発掘調査によって、これまで知られていなかった時期の遺構なども検出されつつある。とりわけ、当該遺跡の周辺では弥生時代の各時期の水田が検出されてきている（御所市教委 2009a・2009c）。このような成果を受けて、今次調査では、水田およびそれに伴う各遺構を検出することができた。当該遺跡のこれまで知られていなかった性格の一端が垣間見えたことは意義深い。今後とも周辺の開発・調査には留意が必要である。

### （参考文献）

- 網干善教 1965 「鴨都波遺跡」（『御所市史』）  
秋山日出雄・網干善教 1959 「室大墓」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊）  
木許 守 1990 「中西遺跡－第2次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第9集）  
1991 「中西遺跡－第3次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第10集）  
2007 「今出遺跡－第1・4次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第31集）  
木許 守 編 1996 「室宮山古墳群辨認調査報告」（『御所市文化財調査報告書』第20集）  
御所市教育委員会 2009a 「京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報II」（『御所市文化財調査報告書』第35集）  
2009b 「京奈和自動車道関係遺跡・室地区発掘調査現地説明会資料」  
2009c 「京奈和自動車道関係遺跡玉手地区発掘調査現地説明会資料」  
阪本普通 2002 「鴨都波16次発掘調査報告」（『御所市文化財調査報告書』第27集）  
闇川尚功 1989 「御所市 室大墓古墳外郭部 発掘調査報告」「奈良県道跡調査概報 1988年度」第2分冊  
奈良県立橿原考古学研究所 2009 「京奈和自動車道蛇穴地区発掘調査現地説明会資料」  
坂精 編 1996 「南郷遺跡群I」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第69冊）  
藤田和尊 1991 「奈良県御所市名柄遺跡の調査」（『日本考古学年報』42  
1994 「橿原遺跡I」（『御所市文化財調査報告書』第17集）  
2008 「今出遺跡（第3次調査）」（『平成5～19年度 市内遺跡発掘調査』『御所市文化財調査報告書』第34集）  
藤田和尊・木許 守 編 2001 「鴨都波1号墳 調査概報」学生社



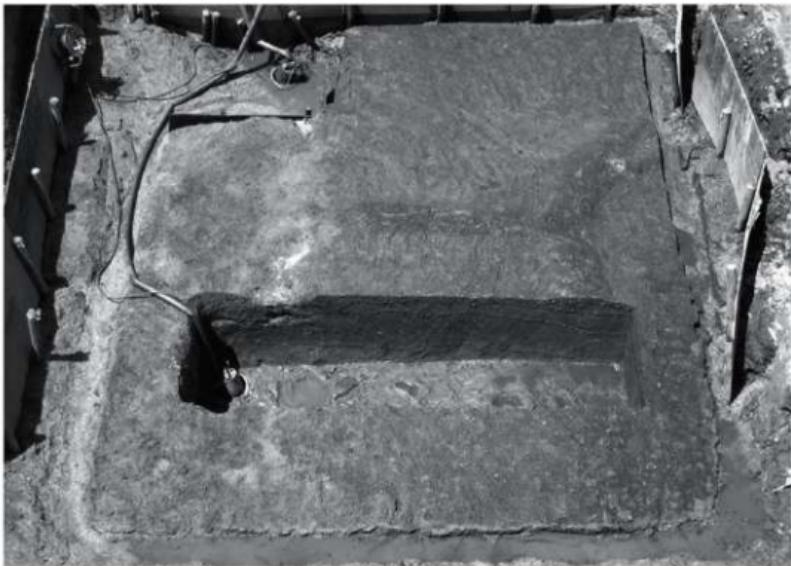
1. 第1遺構面 全景(南から)



2. 第2遺構面 全景(南から)



1. 第4遺構面 全景(南から)



2. 第4遺構面トレンチ 全景(南から)



1. 調査区西壁 全景(南東から)



2. 調査区南壁 全景(北から)

## 報告書抄録

ふりがな	いまで いせき							
書名	今出遺跡							
副書名	第5次発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	岡田 圭司							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL 0745-62-3001							
発行年月日	西暦 2010年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
いまでいせき 今出遺跡	奈良県御所市大字 さらぎ 蛇穴	市町村 29208	遺跡番号	34 度 27 分 13 秒	135 度 44 分 13 秒	20090717 ～ 20090807	85	開発行為 に伴う事 前発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今出遺跡	集落	弥生から 古墳	水田		土師器		弥生時代から古墳 時代とみられる小 区画水田を検出した。	

奈良県御所市

## 今出遺跡

—第5次発掘調査報告—

御所市文化財調査報告書 第36集

平成22年（2010年）2月26日

編集・発行 御所市教育委員会  
御所市1-3

印 刷 株式会社 笹田印刷所  
奈良県御所市今住16-3